



人文学部准教授  
立川陽仁

たちかわあきひと  
博士(社会人類学)  
専門分野は、社会人類学、カナダ先住民研究、漁業研究

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。  
<http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

上図／2005年の儀礼に参加した際、クワクワカワククの友人が筆者にくれた「太陽」のベスト。  
 右図／2006年のまき網によるサケ漁。



2009年、友人の首長Hがボトラッチという儀礼にておこなった演説の様。



多くの現役先住民漁師は、夏のサケ漁だけでなく、春のニシン漁にも参加する。



友人Hが所有するまき網漁船。カナダ太平洋で操業するサケ漁船ではもっとも大きい。



太平洋に点在するタイセイヨウサケの養殖場。不振に喘ぐサケ漁を支えている。

立を達成してきた人々でした。クワクワカワククをはじめとする先住民の現在の生きざまを事細かに記述すること、それが私の仕事だと思っています。

### サケ漁業と先住民独自の労働システムの発明

クワクワカワククはカナダ太平洋沿岸を生活圏とする人々で、伝統的にサケをはじめとする水産資源に依存してきました。19世紀後半、太平洋沿岸で一斉に商業ベースの近代的なサケ漁業が展開されると、クワクワカワククをはじめとする先住民は白人や日本人に負けじとすぐにサケ漁業に参加しました。しかし、まずはアメリカにおいて、つい

で20世紀半ばにはカナダの多くの地域において、技術的な問題や金銭的な問題から先住民がこの産業から排除されてしまいます。それでもクワクワカワククは、それらの困難を乗り越え、現在に至るまでサケ漁を行いつづけているのです。今から10年前、私はフィールド・ワークの際に、友人でクワクワカワククの首長であるHという人物のまき網漁船に乗り、そのシーズンまるまるを彼ら漁師たちとともに過ごしました。彼らと寝食をともにし、働く中で、私は彼らの労働システムが白人漁師のそれとは若干違うことに気づきました。白人漁師の場合、クルーは毎年公募で経験のある者を募り、ある種のプロ集団を形成しますが、先住民の場合は家族や親族をほぼ強制的にクルーに雇用し、時間をかけて、徒弟的に育成します。このいわば古典的な労働システムが、実はクワクワカワククがサケ漁業のいくつかの試練を乗り越える策なのだと思い始めた私は、近代化やグローバル化の現代においていかにこうした古臭い労働体制が機能するのかということを実験的に考察し、昨年その成果を本にまとめました。

### 先住民社会の経済開発

クワクワカワククは、北米の先住民には珍しく、資本主義の流れに比較的うまく適応してきた人々です。そして彼らの経済的な自立を支えてきたのがサケ漁業だったのですが、1990年になると彼らの経済的繁栄にも陰りが見えてきます。長期間に及ぶサケの乱獲のため、サケが減少し、サケ漁業が衰退していったからです。ですから、クワクワカワククはサケ漁業に代わる別の産業を見つけなければならなくなりました。そこで彼らが目を付けたのが、1980年代から導入されている養殖業です。

クワクワカワククが他の北米の先住民と違うのは、他の先住民が経済的自立というものを、まだ見たことのない理想としてしか捉えられていないのに対し、クワクワカワククは、サケ漁をやっていた頃の自分たちの姿という具体的なビジョンを通して理解できる点でしょう。ですから、彼らは経済的な自立のために、サケ資源の管理の失敗を責めて政府から保証を得るよりは、まずは何でもいから働いて金を稼ぐべきだという考えに行きつくのです。そこで彼らの一部はサケ漁の衰退とともに養殖業に目を付け、安定した収入を得ているのです。

ここ数年の私は、クワクワカワクク社会の一部にみられる、こうした先住民による経済開発の変遷を、フィールド・ワークで跡をたどって確かめ、その中から鍵となる活動を理論化する作業にも着手しています。養殖業で成功している先住民は、まだごく一部ですが、次第にその規模は拡大しつつあります。こうした成功者の、成功の条件をうまく理論化できれば、他の北米先住民、あるいはアイヌの経済的自立にも貢献できるかもしれません。

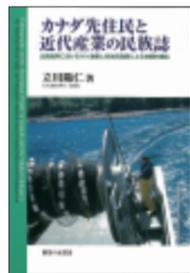
## カナダ先住民の現代の生活世界を読みとく

伝統的な姿やステレオタイプで語られることは多いものの、先住民の現代の生活については、意外なほど知られていません。人文学部では、北米先住民の今の暮らしを調査し紹介すると同時に、その経済的自立の鍵となる活動を理論化することで、アイヌをはじめ他の先住民の自立にも役立てたいと考えています。

### 北米先住民およびクワクワカワククという先住民

社会人類学者として、私はカナダのクワクワカワクク(Kwakwaka'wakw)という先住民を中心に彼らの生活世界を研究してきました。クワクワカワククと言えば知る人ぞ知る人々で、彼らは北米先住民の中でも数少ないトーテム・ポールの作り手であり、あるときには好戦性に価値を置く「異常な」人々、そしてボトラッチという「風変わりな」儀礼を行う人々として紹介されてきました。ただ、有名なのはあくまで彼らの伝統的姿であり、現代の彼らの生きざまではありません。現在の彼らの生活は意外と知られておらず、「職にもつかず、無気力で、酒とドラッグに浸る皮膚の赤い人々」という、まさに「インディアン」というラベルが示す通りの生活をしていると思っている人も多いようです。

確かに残念なことです。そういった生活をしている先住民は北米に多々います。しかしクワクワカワククは、カナダが独立し、近代化されてから現在に至るまでのほとんどの時代において、自らの文化を守りつつ、白人社会の抑圧に抵抗して経済的な自



立川陽仁准教授の著書  
 『カナダ先住民と近代産業の民族誌—北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応』(御茶の水書房)  
 クワクワカワククの近代的サケ漁に関する民族誌。「カナダ出版賞2008-2009」受賞。